

「多文化カフェ 難民とともに生きる ロヒンギャの女性のお話から考える」講演録

令和2年11月28日（土曜日）保谷駅前公民館にて、市内に居住するロヒンギャ民族のカディザ・ベゴムさんから、難民として生きる想い、また日本の社会に期待することなどについてお話いただきました。

以下、お話の要約です。どうぞお読みください。

ロヒンギャ民族として生まれて

「お国はどちらですか?」。異国に住む外国人がよく受ける質問です。みなさんにとっては簡単な質問かもしれませんが、わたしにとってはこれ以上の難しい質問はありません。なぜなら、わたしを国民として認めてくれる国がないからです。わたしはミャンマーのロヒンギャという少数民族の出身で、生まれ育ったのはバングラデシュという国です。およそ千年以上の歴史を持ったミャンマーの少数民族ロヒンギャは、宗教、文化そして言葉の違いで、長年ミャンマーの軍事政権によって差別や迫害を受けてきました。今現在、世界で最も迫害を受けている少数民族とされています。衣食住や教育の制限、宗教や移動の自由を奪われ、命からがら隣の国へ難民として避難する様子がよく伝えられています。日本にも、90年代から保護を求めて来日し、現在は200人くらいのロヒンギャ人が日本に住んでいます。

医師だった父が選択したこと

ロヒンギャの医師だった父は、政治活動の理由で身の危険を感じ、バングラデシュに避難しました。わたしはバングラデシュで生まれましたが、わたしにとって、バングラデシュは安全な国ではありませんでした。ロヒンギャの人々は、難民キャンプに住まなければなりません。子どもたちの教育は充実してなくて、子どもの教育を大事にしていた父は、難民キャンプに住むことを選ばず、バングラデシュ人になりすまして住むことを選びました。

バングラデシュには不法侵入者としてロヒンギャの人がたくさん入っていますので、政府も常に目を光らせています。強制送還される危機感をずっと感じながら、住んでいました。それでも、わたしは高校まで進学することができました。わたしは父と同じように医者になりたかったのですが、受験のためにいろいろな書類を提出すると自分の民族がばれてしまう恐れがあり、進学を断念しました。わたしが19歳のころです。大学に入ることができず、すごく悩んでいたところ、夫が日本で難民認定された年、夫の父母もミャンマーからバングラデシュに避難していて、そこを訪れた夫はわたしと出会い、結婚することが決まりました。

難民というアイデンティティ

2006年12月31日、夫の呼び寄せで日本に来ることができました。日本には、難民という状況から脱出するという、新しい将来を求めて来ました。勉強ができますし、民族のために貢献したいという夢を持っていました。わたしの夢は簡単に叶うと思っていましたが、現実とは全く違っていました。びっくりしたのは日本語が難しいということ。挨拶もできないのに、どうやって大きな夢に向かって進むのかと不安でした。物価も学費もすごく高い。夫の稼ぎで生活を維持するのがやっとという中で、大学に行きたいなんて言えない状況でした。

それでも、ぜったい大学へ行くという夢を持ち続けました。なぜかという、わたしには難民というアイデンティティがあるからです。難民条約により難民認定されることで、難民という地位を得ることができます。その地位は迫害と戦ってきたというステータスです。難民というと、遠い国の戦争から逃れてきた貧しい人のことしか思わないかもしれませんが、難民たちはみなさんと同じように、笑い、食べ、喜び、悲しみ、夢を持っている人間です。教育があれば、難民は自分の夢を叶えることができますし、受け入れた国の負担になるのではなく、むしろその国の発展にいろいろな形で貢献できる存在になるのです。

教育を受けることで難民のエンパワーメントにつなげる

そこで必須なのが教育です。教育を受けて、初めて自分の状況を周りに発信することができますし、できることが増えると、エンパワーメントにつながります。わたしはそのため、大学に行って教育を受けて、その立場になりたいという思いを持っていました。日本政府は難民のために、RHQ支援センター難民事業本部で6か月のプログラムを無料で提供しています。日本語と生活の基礎を学ぶプログラムとなっています。わたしの人生はそこから始まりました。2007年4月のことです。その短い期間で、だいたい日本語で思っていることを伝えられるようになりましたが、まだ大学に進学できるくらいのレベルではありません。さらに日本語を学ぶために専門学校で学ばなければなりません。学費が高いのでどうしたらいいだろうと困っていたところ、1年に1人、学費を7割免除するという日本語学校の制度があると聞いて、応募してみました。毎日夜3時くらいまで必死で勉強して、わたしは合格することができました。そこで勉強し、日本語能力試験1級に合格しました。

とても狭き門 UNHCR の奨学金制度

日本語学校で、大学に行けるくらいの能力は得たけれど、そこでまた学費の問題がありました。奨学金を探したところ、UNHCR（国連高等難民弁務官事務所）が、1年に1人のために提供しているのがわかりました。関西大学と青山学院大学にしかその奨学金制度はありませんでした。ということは、学生2人しか受からない。結婚しているので、大阪まで行くことはできませんから、青山学院大学しかありません。ほとんど宝くじを買うようなつもりで受けました。

筆記試験と面接試験受け、合格しました。このときわたしの人生が180度変わりました。2009年4月、青山学院大学総合文化政策学部に入學しました。本当は国際関係論とか国際政治学とかを学びたかったのですが、それは奨学金の対象ではありませんでした。「総合」だから幅広く学べるかなと思い、選びました。そこでわたしは、いろいろな国の文化や、民族問題、難民問題など、幅広く学ぶことができました。

思いがけずわたしの身に起きたこと

4年間の大学生活で本当にいろいろなことを経験しました。1年生の時は、全く日本語がについていけませんでした。初めて日本人の学生と一緒に勉強して、書くのも聞くのも遅く、日々泣きながらの生活でした。周りの友達や先生方が助けてくれて、1学期の終わりころから、ほぼ一人の力でできるようになりました。そして2学期が終わるころ、思いがけず長男を妊娠しました。その時、夫が次のように言ってくれました。「赤ちゃんがお腹の中にいるときはあなたが頑張って、出てきたらわたしが頑張るよ。神様は絶対に道を開いてくれます」。これがわたしの救いの言葉でした。2年生になって無事出産することができました。当時夫は自営業をしていたので、家で仕事をしながら育児をしてくれました。そのおかげで、わたしは学校生活を送ることができました。2年生と3年生で単位をいっぱい取って、3年生でわたしは長女を妊娠。長男のときに大丈夫だったので、また今回もきっと大丈夫でしょうと、わたしは神様に任せて、あきらめませんでした。4年の大学生活の中で2回も出産したということで、学内でもわたしの存在が知られるようになりました。今思うとすごく恥ずかしく思うのですが、その当時はなぜか恥ずかしいとは思いませんでした。

3年生になったら、周りの学生が就活し始めました。子どもがいるのですが、わたしもやりたいと思い、夫もいけ！と言ってくれました。そんなときU社と出会いました。U社は難民というバックグラウンドを持っている学生のために、UNHCRとのパートナーシップでインターンシッププログラムを開いていました。当時わたしは長男が生まれ、神様への感謝の思いからヒジャブ(イスラムの女性が頭に巻く布)を身に着けるようになっていました。このような服装で日本の会社で働けるのか心配だったのですが、U社は受け入れてくれました。10日間のインターンシップだったのですが、たくさんの感動があり、将来この会社に入社したいと決めたのがきっかけとなりました。U社は世界中の難民キャンプで衣類を配っています。バングラデシュの難民キャンプにも寄付してくれています。感謝を表すためにも、U社で働いて、この会社のことを周りに伝えていこうと思っています。

日本に暮らす難民が直面する課題

日本には現在200人くらいのロヒンギャ民族が暮らしています。そのうち難民認定されているのは、わずか20人だけです。そのほかには、特別在留資格を持っている人が100人

くらい、仮放免が10人くらい、収容中の方が数人。条約難民認定された人と特別在留資格を持っている人には、仕事の許可があって、医療や教育を受ける機会があります。ただし、仮放免の方や収容されている方は、それがありません。仮放免の方が、今すごく困っています。ほとんどの方が館林に住んでいます、仕事をすることができません。生きるためには食べなければいけません、食べるためにはお金が必要です。お金のために働かなければなりません、それができない、全部つながっているんです。それでみんな周りの民族の人々に助けられて生活しています。病気になると大金を払って治療するしかありません。そんな状況で館林に暮らしています。

2013年に卒業してすぐに館林に引っ越しました。そこでたくさんの同じ民族の人を見て、難民としてどのような課題があるのか、初めて実感しました。一番の難しさは言葉の問題。また物価が高いので、難民たちは長い時間働かないといけません。夫は朝から晩まで働いて、通常の8時間では家計が回らないから、残業もやります。女性は家で子育てをして、家から出られない生活をしています。子どもは3歳になったら幼稚園に、6歳になったら小学校に行きますが、お母さんは日本語が全くわからないままです。夫は外で働いているので、日本語でのコミュニケーションはできるようになりますが、女性たちは日本語が全くわからないので、病院や役所に行きたいとき、誰かが通訳についていかなければなりません。わたしは5年間館林で、毎日誰かの通訳をしなければなりません。わたし自身も仕事があるのに、仕事が終わったらすぐに誰かと一緒に病院にいたり、学校に行ったり、そういう活動をしていました。

家を借りたいときには、外国人であることを理由に断られます。外国人でも大丈夫な場合でも、保証人が必要ですが、難民だからなかなか見つからないという問題もありました。それから就労が不安定です。難民は日本語の読み書きができないので、重労働しかありません。派遣会社経由で話が来るので、すぐに仕事があり、残業もすごくある一方、すぐに仕事がなくなって、簡単に解雇されることがあります。それでは不安だらけの生活とならざるをえません。その仕事が好きでやっているわけではないので、体も心も患ってしまっている人もたくさんいます。日本での生活は楽しくなくて、苦しい。でも生きていくために戦うしかない。そんな感じで生活しているということを初めて実感しました。

女性の教育を始める

そこで彼らのことを少しでも助けようとわたしが考えたのが、女性の教育ということでした。女性たちが日本語を話せることで、生活が変わるんじゃないかと思いました。女性が日本語をできるようになったら、夫や通訳に頼らず、自分一人で病院に行ったり、子どもたちの学校に行ったりすることもできるし、子どもたちに勉強を教えることもできます。現状として、子どもたちはほかの日本人と同じレベルで勉強ができていません。家に帰ってきても、勉強を教えてくれる人がいませんから。学校から来るお知らせも読んでもわからなくて、大

事な書類を提出できなかつたために、子どもたちが嫌な思いをすることもありました。一番初めにやったのが、子どものための学習クラスです。市役所と公民館に声をかけたら、部屋を用意してくれました。ボランティアの先生とわたしと2人で、子どもたちの勉強を見てあげたり、学校のお知らせを見たりするような活動を2年間やりました。2017年には、女性のための日本語教室も開くことができました。

館林の公民館での活動

ロヒンギャの女性が初めて家から出られたということ、また挨拶や簡単な対話までできるようになったのは大きな成果だったと言えます。2017年から2019年の3年間で、簡単な作業の仕事に付けた人が10人くらいいます。

ロヒンギャの女性のクラスは公民館で行っていました。ロヒンギャの文化を地域のみなさんに紹介する講座も公民館がやってくれました。ロヒンギャの女性が日本の文化を知らないので、日本文化を紹介する講座もありました。こういう活動に参加して、いろいろな文化を知ることができて、人生が初めて楽しいと感じたのです。なぜイスラム教がヒジャブをしたり、ハラール食を食べたりするのかとか、そういった講演会も行いました。公民館まつりでは、自分たちの食文化を紹介したりしました。最初の年は2人だけの参加でしたが、とても評判がよかったので、その翌年には参加者が増えたりして、公民館は互いの文化を理解する交流の場となっていました。

大学院進学を目指して東京へ

ロヒンギャ民族のためになにかやりたいという目標を持って大学院に進学しようと思い、東京に引っ越してきました。ロヒンギャ問題は世界の問題と結びついています。この問題をどう整理すればいいのか。どのような行動をとらなければならないのか。大学院で専門的な勉強をしようと思っています。東京は物価が高く、いろいろな問題もあるのですが、今までと同じように、神様がうまく道を開いてくれるはずです。さらに、わたしには助けてくれる人がたくさんいます。コロナの影響で2か月間仕事がなかったので、家で勉強して、難民高等教育プログラムを受験してみました。今月26日発表があり、なんと合格しました！4月から大学院に行きます。早稲田大学アジア太平洋研究科で学ぶ機会を得ましたので、目標に向かって、また一歩歩み出します。そこでは、ロヒンギャ問題に貢献できるように、南アジア、東南アジアの歴史、難民問題、世界中の難民問題の課題を分析したり、解決方法を分析したり、そしてもちろん日本にいるロヒンギャの人々の生活を向上させたいと思います。最終的には、バングラデシュで難民キャンプに住んでいる子どもたちの将来を明るくするために貢献できるような存在になりたい、それが今の目標です。

誇りをもって「わたしは難民です」と言いたい

今わたしは難民というアイデンティティがあって、「わたしは難民です」と言うのはちっとも恥ずかしくありません。わたしには国がなくても、一人の人間として、難民問題に貢献できる力があります。わたしも他の難民も、教育の機会があれば、なんにでも挑戦できますし、教育を受けることで、受け入れる国のために貢献できる存在になれます。わたしにもみなさんと同じように可能性や夢があって、世の中をよくするために貢献したいという希望を持っていることを、自分で伝えなければならぬと思っています。そのためには、教育を受けることがすごく大事です。日本語で話せなければ、このことを今日のようにみなさんに伝えることができなかつたし、大学に行くことがなければ、今の活動につながっていませんでした。みなさんの温かい心遣いや支援がすごく必要になってきます。生きていくためにすべてを捨てて、なにもない状態で他の国に逃れてきた私たちは、持っている夢を失わないように、自立できるまで支えてくれる制度が必要です。

日本では、RHQ 支援センターで6か月間日本語を学ぶ機会がありますが、高等教育に進学するには、十分ではありません。希望に合った目標が実現されるために、一人ひとりに合わせた支援が必要です。6か月間のあと、さらに日本語の勉強ができるような奨学金制度をもっと増やしてほしいし、大学に行く機会を増やしてほしいと思います。

外見が違って、子どもたちが受け入れられる社会へ

わたしには小学4年生と2年生の2人の子どもがいます。生まれ育った家庭環境が一般の日本人と違うので、学習の面で、ほかの日本人の子どもと比べて遅れてしまうことが多いです。成績を上げるために、塾に行かせたいと思うのですが、経済的なしぼりがあります。そこで、学習支援をボランティアの方がやってくださったら、すごく助かります。わたしの子どもも、公民館の教室や大学生がみてくださっています。そんな支援を必要な方が他にもたくさんいます。例えばロヒンギャの家庭だったり、他の難民であったり、外国人の経済的に困っている人たちの子どもたちのための支援がすごく大事だと思います。

わたしは大人になってから日本に来ているので、ある程度自分のバックグラウンドをわかっていますし、日本のみなさんに伝えることができますが、わたしの子どもたちは、日本で生まれ育っているにも関わらず、100%日本人になれない、100%ロヒンギャ人になれない、すごく大変な状況だと思います。うちの子どもたちは、自分のことをロヒンギャ人というより、日本人だと思っています。学校で、友達みんなと自分は同じだと思っています。そこで、あなたは違いますよ、あなたはこの仕事できませんと言われてしまったら、わたしは母親としてすごく残念な気持ちになります。外見が違って、同じ仲間として、同じように挑戦できるような環境であってほしいです。日本人の子どもができることを、わたしの子どもも普通にできるような学校や社会に、それがわたしが望んでいることのひとつです。今わた

しには自分の民族や世界の難民問題に貢献できるようになるという夢と、自分の子どもたちを、イメージの悪い難民ではなくて、なんにでも挑戦できるたくましい人間に育てるという願望があります。4人の家族で、その夢に向かって一步一步進みます。ある日、日本で難民のイメージがよくなるまで、わたしたちの挑戦は続きます。